

理学部には一カ所に集められた学部の図書館というものがなく、各教室がそれぞれ独自の図書室というものを持っています。その教室の“図書室に望むこと”を書いて下さいとのことですが、教室の図書室は私達の研究の場の外にあるとは感じられず、いいかえれば、誰かが管理運営して私達がそれを利用するというのではないと思います。それだから私達のものとして、どのようにそれを運用していくか、であると思います。

現今の日常の仕事は定員外職員が当たっていますが、当教室の図書の管理は、図書係という一人の教官がしていることになっています。私が大学院に入学した頃、雑誌類はすべての教官を回遊した後、図書室に入れられていたので、院生の読むのが相当遅くなることを院会で問題にしたことがしばしばありました。その事や他のことも含めて二年ほど前に図書の利用規則が改良されました。今では在庫の書物を利用するという点で、ほとんど不便が感じられないようになりました。ところで図書室の運営は当然、教室の運営と関係があるわけですが、図書という特殊性が教官、院生、学生の区別をなくす、という点で全構成員の問題であると思います。運営とは、ただ単に今ある書物を管理したり、利用するという事だけに限定されるのは、言うまでもなく、おかしい事で、そのなかにどのような図書を購入していくか、という内容の充実、発展のことを抜かすことはできません。この最後の点においては当教室の場合、十分だとは思いません。それは要求する書物の種類が、研究分野によって異なるというのみならず、各階層の違いによっても左右されます。学生は解説書や教科書的なものを、院生は新しい分野や境界領域に関しての書物を多く望むかもしれません。こういった点での要求が、今は全然反映されていないとは言いませんが、より自然に、また、より早くなされるように考えていくことが必要だと思います。それには各研究単位、各階層からの意見が反映できる図書委員会なる運営組織を作ることも一案かもしれません。しかし、何といっても予算が少ないことは致命的ですので、文部省の研究費の増額が、図書の充実、発展の基礎にあたると思います。

あまり勉強もしていず、図書館をひんぱんに利用するなどということから程遠い僕にとって、図書館の改革についてもはっきりした要求は持っていないので、京大、とくに経済の図書館の利用についての感想を一つ二つ。

修士論文の関係で、ロシアの20世紀初頭の農民運動についての文献をかなりさがしてみた。その頃の記録で中心的なものは、「大十月社会主義革命」というタイトルで、1917年3月から10月までシリーズになっているものである。この購入の仕方が不思議である。3、4、5、8、10月の分は経済の方、6、10月の分は法の図書館に入っていて、全くばらばらに購入されている。京都と神田のナウカでどうにか抜けている分を補充できそうだが、購入について、もっと計画的にできないものかと思う。

もう一つ、近頃感じていることは、就職後に備えての事である。京大と東大、一橋などの図書館に大きな蔵書があり、それを利用したい為に、わざわざ籍を残しておいたり、近くの大学を選んで就職する人もいるようであるが、僕の場合でも、図書館で借りている本がなくなってしまうと研究が完全にストップしてしまうのは明白である。うまく、この大きな図書館を利用できる範囲内に就職できればいいが、そうでない場合は……？ 今は、なるべく必要な資料をゼロックスや電子リコピーでとって自分でもつようにしているが、問題は、図書館相互の連絡の形と、その利用の開放性にあるように感じる。